

## 第 11 回造形芸術教育協議会 議事録

本会は、2022 年 2 月 20 日（日）10 時 00 分から、Zoom によるオンラインで開催された。終了は、12 時 17 分であった。出席者は、日本美術科教育学会より 4 名、美術科教育学会より 6 名、大学美術教育学会より 4 名 計 14 名であった。

出席者 日本美術教育学会 大橋，松岡，細谷，藤田

大学美術教育学会 八重樫，秋山，新井，村田

美術科教育学会 山木，宇田，大泉，佐藤，新関，新井（本部事務局・記録担当）

### 審議事項

三学会連携・統合について、造形芸術教育協議会 幹事校である美術科教育学会 山木代表理事より、それぞれの学会の現状の予算枠組み、会員数、将来的な展望など互いの学会の特性を見定めつつ、統合の可能性を模索することには意義がある旨、説明がなされた。

続いて、各学会のこれまでの協議状況などが共有され、今後の課題と取り組みについて意見交換がなされた。以下、議題に沿って出された意見などを簡略化し箇条書きにて記す。

#### 議題 1， 前回（令和 3 年 3 月 21 日）の議事録の確認

- ・司会進行役より、前回の内容の確認がなされた。

#### 議題 2， この間の各学会の協議状況・結果等の共有

- ・美術科教育学会：添付（1）のとおり報告がなされた。
- ・日本美術教育学会：添付（2）のとおり報告がなされた。また 3 つの具体的な提案がなされた。

**提案①**：三学会として、デメリットを掲げて統合に抗うことはしないことを確認する。建設的に「何ができるか」を真摯に積みかさねる場とする。

**提案②**：問題解決に向けて、まずは段階的にめざす具体的なモデルをマイルストーンとともに示し、ロードマップとして共有する。

**提案③**：上記ロードマップの作成と実行のため、これまでの年一回の定例協議会に加えて、WGを常置し、勉強会の開催などと合わせて検討を進めていくこと。

- ・大学美術教育学会：三学会の統合・連携について、学会員へ周知していくことで合意形成された旨、また連携・統合への検討がなされ概ね合意はなされた旨、学会の特徴もあり、現時点では理事レベルでの具体的な議論はできていない旨、報告がなされた。

### 議題3、今後の課題と取組についての意見交換

各学会の報告に対しての質疑の後、上記、日本美術科教育学会の提案①~③に対応し意見交換がなされた。

#### ●提案①：3学会の連携・統合にむけての意見交換

- ・三学会共に、互いをよく知る必要がある。
- ・学会誌や理事選挙制度などを知っていくことで、互いの学会の構造や中身をよく知る契機になるのでは。
- ・美術教育という理論と実践が伴う学問の特性を踏まえ、研究自体の継続性・将来性に危機感がある。現場の実態・実感を知らないといけない。
- ・研究と現場を繋いでいく往還が非常に厳しい状態。ここを考慮しながら統合を進める必要もある。
- ・教科専門というものが激減していく中、地域の研究会の縮小もあり、美術教育の状況が大きく変わっているという実感があり、時代として大きな曲がり角にあると感じている。
- ・美術という教科は、教科専門があってはじめて成り立つと考えている。その点で、純粋に学問としての理論だけではない。それを踏まえて、投稿論文において、研究の多様性を認めることが大切。
- ・美術科教育学会には、美術科教育研究者のほか、教科専門研究者（絵画、彫刻、造形芸術学など）も所属している。美術科教育学会の趣旨に賛同し、多様な会員が所属し、口頭発表・論文発表をしている。図画工作・美術の授業については、教科教育学、教科内容学双方からのアプローチが必要であり、上記の懸念はある程度解消されている。
- ・学会運営陣の人員の重なりが目立つ。40代のリーダーが少ないのではないか。
- ・この協議会の議論では、それぞれの学会の個別の状況や課題と三学会連携・統合の議論が錯綜してしまっている。分けて議論していく必要があるのではないか。三学会連携・統合の議論とは別に、学会中堅リーダーの育成、現場との連携、教職大学院問題などについて議論していくべきである。
- ・美術教育に関する学会が枝分かれしていった歴史的経緯を踏まえつつ、今一度原点に戻る必要がある。教科専門、現場の教員、教科教育学の専門のネットワークが必要。
- ・三学会とも統合する方向性を掲げている中、その道のりを丁寧にやっていく必要がある。
- ・統合するとか、いつでも統合できる状態を作っていく必要がある。学会誌の二重投稿防止などでは、すでに連携を図っている。例えば、統合しても問題ないところから始めればよいのではないか（例：互いの学会誌を配布しあう、投稿論文の注釈形式を統一など）。
- ・学会誌論文は、各学会の特徴が最も出るところであり、ここを統一的に考えるのはむしろ難しい。学会誌論文は各学会の独自性を認め、学会連携イベントや共同プロジェクトなどから始めることの方がやりやすいのではないか。

(三学会の学会誌の共通性などについて)

- ・三学会の共通性を探るとき論文集が役立つ。論文集の傾向を探ることで共通項が見えてくる。拙速に進める必要はなく、それぞれの学会誌を見直してみてもどうか。
- ・学会誌では、査読基準が三学会で異なる中、二重投稿問題に対して、互いに連携している。こういった例を続けることが、互いの学会を知っていくことになる。
- ・学会誌の査読に関して、中身と査読者の専門性を割り当てるのが大変な現状がある。母体が大きく、様々な専門をもつ研究者いることが大切。
- ・論文フォーマット、査読体制が共通していると、投稿する人のスキル・質も高まり、情報の共有もしやすいのではないか。
- ・本会をさらに頻繁に開催する。議論を深めていくためにも。
- ・さしあたり9月までに1回、3月までに1回の2回程度が妥当なのではないか。
- ・全国的な図画工作・美術科教育（教育現場）の実態や課題（正規教員数の激減など）を掌握して、その危機的状況を共有すること。

#### ●提案②：段階的にめざす具体的なモデル、マイルストーン、ロードマップの共有について

- ・「連携」という言葉も出るし、統合と言っても、「アンブレラ型統合」「完全統合」というように、言葉の幅がある。なにを指して「連携」といい、「統合」というのか、整理していく必要がある。
- ・ロードマップ作成には明確なゴールが必要。マイルストーンとして連携を深めながら、中心メンバーが統合に向かって話し合える場づくりをゴールとするロードマップということでしょうか。
- ・ロードマップでは、最終の目標を考えなくてはいけない。その目標設定に際して、答えを出すのは各学会の会員である。すなわち、各学会の会員の意見を集約しながら、連携や統合の議論を進めることが大切である。
- ・各学会が会員の意思決定を担保しなければならない。
- ・付託された役員がリーダーとして見識・方向性を示しつつ、言うまでもなく、決定は会員に委ねられる。学会員に周知していくことが大切。
- ・徐々に課題を解決していき、会員に諮る。この繰り返しで物事が組み上がるのでは。
- ・3学会ともに会員である方（役員をされている方）の意見や提案が大事（尊重すべき）である

#### ●提案③：WGや勉強会の開催について

- ・他学会の研究大会参加や共同研究など行い積極的に交流を進め、会員相互の理解を深めること。掛け声だけでなく具体化する。
- ・互いの理解を深めるための議論も必要。各々の学会のアイデンティティについて相互理

解をさらに深める。

・美術科教育学会では、理事のメンバーが3年ごとに変わり、よく言えば、新陳代謝が進む反面、次の理事会メンバーにこの協議会の意向を正確に伝え、継続的に取り組む必要がある。ちょうど4月から新体制になるので、今回の成果と方向性について次期理事会に伝える予定である。

・ワーキンググループは、業務的になりがちなので如何なものか。義務的意識は負担感につながる。むしろ、研究目的があるプロジェクトや研究を連動して立ち上げるなどすれば、業績にもなり、望ましい。この方向を提案したい。

・三学会の理事会およびそれぞれの会員に対し、統合の可能性について議論をしている情報が周知されている現状は、7～8年前に比べると明らかに進んでいる。そのことに意味がある。

#### 審議事項の結果

提案された課題に対して意見交換がなされた。決定事項はないものの、年に2回ほどこの協議会を開催することが望ましい。

その際、各学会誌の特性を見据えた課題についての認識の深化を図り、連携や統合に関わる課題解決のために必要な研究会をどのようなかたちで持つかなど、議論を進めていくことが重要である。

また、三学会共通に進めることができる企画・提案が必要だとする意見も多かった。

当然ながら、全ての決定権は会員が有すること、したがって、各学会は会員の意向を最大限、重視し、この協議会に反映させることも確認された。

以上